

≪研究報告≫

## 看護学部1年次生の初回臨地実習時のコミュニケーションにおける関心事 — 実習場面の再構成記録による分析 —

工 藤 千賀子<sup>1)</sup>, 渡 部 菜穂子<sup>1)</sup>, 阿 部 テル子<sup>1)</sup>

**要旨：**本研究の目的は、看護学部1年次生の初回臨地実習におけるコミュニケーションの特徴、特に学生の関心事を明らかにすることである。受持ち患者とのコミュニケーション場面の再構成記録35例の記述内容を林らの分類に基づき、『患者志向』、『自己志向』、『関係志向』にカテゴリー化し、それぞれの特徴を分析した。その結果、患者の感情や思考に関心が向いている『患者志向』は16例と最も多く、看護学の知識は浅いながらも看護の客体である患者の言動に関心を向けていた。学生自らの感情や思考に関心が向いている『自己志向』は11例であり、特に実習初日に【会話をしなくてはならない焦り】を感じ、実習経過とともに【何をしたいか不安】、【何かしてあげたい願望】を持つ傾向が認められた。患者との関係に関心が向いている『関係志向』は8例であり、実習全期間を通して、患者に接する度に表裏の心情である【拒絶される恐怖心】と【受け入れてもらった安心感】を有していた。

**キーワード：**初回臨地実習、コミュニケーション場面、関心事、再構成記録

### はじめに

「コミュニケーション」という用語は、一般的にメディアや情報を意味する場合と、意思疎通を指して用いられる場合がある。林（2004）は、「複数の人間の間の記号を媒介とする相互作用」と定義し、コミュニケーションは単なる相互作用ではなく、記号あるいはメッセージを媒介とする相互作用であり、意味が交換され、共有される過程だ、と述べている。また、橋本・石井（1996）は、社会的動物としての人間のコミュニケーションは、「人間が、一定の環境条件で言語及び非言語メッセージの交換により、相互に影響し合い、思想や感情を共有する過程である」と述べている。元来、コミュニケーションは、対人関係を築くために学習されてきた対人的な対処行動なのである。相手を同定し、自分と照合できることがコミュニケーションを結ぶための前提である（大坊 2009）。

看護職者にとって、円滑な対人関係の基礎となるコミュニケーション能力について、淘江ら（2004）は、コミュニケーション技術は看護実践における基本的共

通技術であり、看護師のコミュニケーション能力には、一般的コミュニケーション能力に加えて、専門的コミュニケーション能力が必要であると述べている。これは、看護学生にとっても同様に求められる能力であり、修得しなければならない能力である。

しかし、千葉（2002）は、人とのかかわりを十分体験していない若者が増えているのが現代の傾向である。看護学生だからと言って、社会的スキルのある若者ばかりではない、と述べているように、近年の社会環境の変化によって、コミュニケーション能力の乏しい学生も看護師を目指している現状がある。そのため、看護基礎教育において、学生のコミュニケーション能力の育成・強化が課題となっている（野崎ら 1999, 村上 2000）。

本学部では、1年次生後期に、初めての臨地実習である「基礎看護学実習Ⅰ」を履修する。この臨地実習では、患者-看護師間の人間関係の成立について理解を深めることを目標とし、学生は患者とのコミュニケーションを実践する。実践した結果を評価し、コミュニケーションにおける自己の傾向や課題を明確に

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：工藤千賀子 〒036-8231 青森県弘前市稔町20-7

TEL：0172-31-7100, FAX：0172-31-7101, E-mail：kudou-chi@hirogaku-u.ac.jp

するために、学生には実習中に展開された受持ち患者とのコミュニケーションの一場面を選択し、再構成するように求めている。再構成するために、体験したことを詳しく思い出すことのみが必要なのではなく、体験したその時々状況からいったん離れて、回想と反省をし自分自身の動機や行為について洞察する機会となり、学習用具としても役立つ、と言われている（E. ウィーデンバック 1981）。我々はこれまでの当該実習の指導経験から、本学部1年次生においても看護学生としてのコミュニケーション能力に関する問題や課題があると感じていた。1年次生が、看護学に関する既習の学習内容を実践に活用するために必要なコミュニケーション能力の育成・強化を目的とした教育の実践のためには、現状のコミュニケーションにおける諸要因を明確にし、教育方法の検討が必要であると考えらる。

看護学生の現状について、川田ら（2005）は、生活体験が乏しく他者への関心や思いやり不足という深刻な問題をもたらしている、と報告している。また亀田（1998）は、看護学生は臨地実習中のコミュニケーションを特殊なものとして認識し、日常生活でのコミュニケーションよりも不得意であると感じている、と報告している。さらに工藤ら（2007）は、看護学部1年次生は、患者との対人関係を築くうえで有効とされている社会的スキル得点は高いが、初歩的なスキルに属する「会話を始めることができる」ことは、最も低いことを明らかにしている。以上のように、看護学生のコミュニケーション能力の現状に関する調査研究は複数行われているが、看護学生の初回臨地実習におけるコミュニケーション場面の再構成を分析した研究報告は見当たらない。

## 目 的

本研究の目的は、看護学部1年次生の初回臨地実習におけるコミュニケーションの特徴、特に学生の関心事を明らかにすることである。

## 方 法

### 1. 対象

A大学看護学部在籍している2011年度1年次生後期の「基礎看護学実習Ⅰ」（必修科目45時間1単位）

を受講した57名が記述した再構成記録のうち、研究協力を同意が得られた35名分の再構成記録を分析対象とした。

### 2. 分析方法

再構成記録の「自分が考えたこと・感じたこと」の記述内容をコード化し、林らの分類（2012）に基づいて、『患者志向』『自己志向』『関係志向』の3志向別に分類（カテゴリー化）し、各カテゴリーを単純集計した。『患者志向』とは、学生が考えたことや感じたことが患者の感情や思考に関心が向いているもの、『自己志向』は学生自らの感情や思考に関心が向いているもの、『関係志向』とは患者と学生の関係に関心が向いているものである。

さらに、研究者3名で、3志向別に「自分（学生）が考えたこと・感じたこと」の記述内容の意味を解釈・分類（サブ・カテゴリー化）し、各サブ・カテゴリーを単純集計した。また、サブ・カテゴリー別に、記述した学生の心理状況と構成記録が記述された実習経過日数との関連性の有無、および心理状況の変化について分析した。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、研究者の所属大学倫理委員会の承認を得て実施した。学生への協力依頼は、実習の成績開示後に文書と口頭で行った。依頼にあたっては、研究の趣旨、参加・撤回の自由、個人情報保護とデータの取扱い等について口頭と文書で説明し、文書で同意を得た。データの収集は、シール付きの封筒を配布し、再構成記録と同意書を封入し、学生自身が封をしたのち、鍵がかっている回収箱に投函してもらった。回収した再構成記録は、学籍番号と氏名を伏せ、個人が特定できないようにしコピーし、後日学生へ返却した。コピー機のデータは消去した。コピーした再構成記録は、記録の筆跡で個人が特定されないよう、記述内容のすべてをExcelに入力しコード化してから分析した。

## 結 果

2011年度「基礎看護学実習Ⅰ」を履修し再構成記録を記述した57名中、同意が得られたのは36名、回収率63.15%であった。同意が得られた36名分の再構成記録のうち、学生自らの受持ち患者以外の患者とのコ

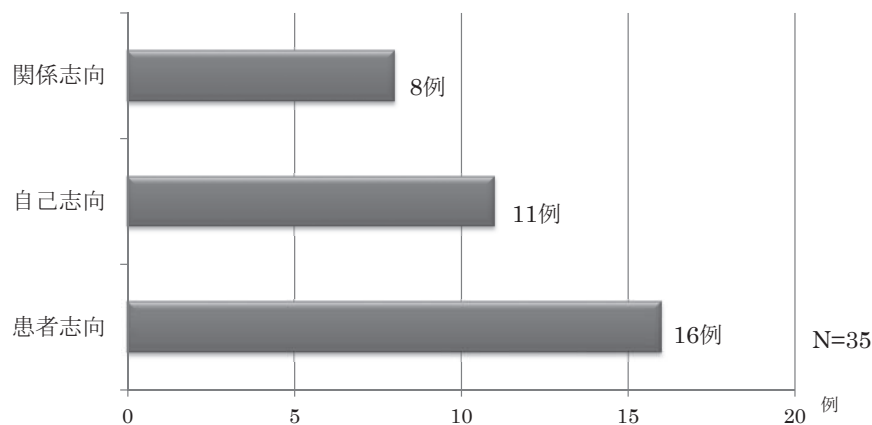


図1 3志向別分類

表1 『患者志向』の実習経過日数別例数

患者志向 16例				
実習日数	【原因の推測】	【断定】	【言動を推察】	【影響を推察】
1日目	1例	1例		
2日目	1例		1例	
2または3日目	2例	2例	1例	1例
3日目	1例	3例	2例	

コミュニケーション場面を記述していた1名分を除き、35名分（有効回収率97.2%）の再構成記録35例を分析対象とした。

35例を林らの分類に基づき3志向別に分類（カテゴリー化）した結果、学生が考えたことや感じたことが患者の感情や思考に向いている『患者志向』が16例（45.7%）、学生自らの感情や思考に関心が向いている『自己志向』が11例（31.4%）、患者と学生に関心が向いている『関係志向』が8例（22.9%）であった（図1）。

さらに、3志向別に記述内容を解釈・分類（サブ・カテゴリー化）し、病院実習3日間の実習経過日数別に分析した。

#### 1. 『患者志向』（表1）（表2）

##### 1）【患者の訴えの原因を推測】：5例

患者が「寝られない」、「おならは出ている、全部食べている」など訴えたことに対して、「なんでかな」「食べなくて便が出ないのかな」「何でこんなに興味が無いんだろうか」などのように訴えの原因を推測している記述が5例あった。再構成記録が記述された実習日

は、実習1日目・2日目・3日目に各1例、実習2または3日目（実習初日ではない日）に2例であった。

##### 2）【患者の言動の意味を断定】：6例

患者が手術痕を見せてくれた場面で、「瘢痕が残るのは、やっぱり嫌だね」と感じたり、車椅子に座っている患者が、体を前後にゆする行動をみて、「散歩に行きたいんだな、散歩だし、少し長い距離の方がいいよね」と断定したり、患者の「トイレが近くて」という訴えを「体にはとても良いことだ」と断定する記述など6例みられた。再構成記録が記述された実習日は、実習1日目に1例、実習2または3日目（実習初日ではない日）に2例、実習3日目に3例であった。

##### 3）【患者の言動の意味を推察】：4例

患者がアイスを持っている姿を見て、「自分が不在の間に買いに行ってきたのかな」と考えたり、患者が「ごめんね、遅くなっちゃった」といった言葉に対して、「気を使わせちゃったかな」と感じる記述など4例みられた。再構成記録が記述された実習日は、実習初日にはみられず、実習2日目に1例、実習2または3日目（実習初日ではない日）に1例、実習3日目に2例であった。

表2 『患者志向』のサブ・カテゴリー別記述内容

ID	患者が話したこと・行ったこと	自分が考えたこと・感じたこと	サブ・カテゴリー
24	「昨日は、あの人（同室の患者）が夜にうるさくて2時くらいかな？」 「昨日はうるさかったな。朝も5時とかにうるさくて、さっぱり寝られない」	さっきは「寝れた」と言っていたのに、本当は寝れてなかったのか・・・ 4時間くらいしか寝てないのか・・・	【患者の訴えの原因を推測】 5例
23	眠そうにしながら、「おはようございます」眼が開ききっていない様子 「昨日あんまり寝れなかった」	昨日眠れてなかったのかな。それとも今起きただけなのかな 寝れなかったんだ。なんでかな。聴いてもいいのかな。でも、聴かないと看護師に伝えられないし	
2	少し視線を落としながら、「人生何があるか本当にわからないよ」 「そう。いろんなことがあるし、いろんな人がいる。人を裏切るような人は好きじゃないな」	右足は切断してしまったし、左手も動かなくなってしまうて、以前とは違う生活になったのだろうな 今まで経験を積んできたからそう思うのかな	
3	「ああ、おなかはずまってないし、おならもたくさん出るよ」 「はい、全部食べました」	献立では今日の朝ご飯は患者さんが嫌いなものだったからちゃんと食べただろうな。もしかしたら食べなくて便が出ないのかな そっか、全部食べたんだ。もしかして、食事量とか制限されてたし、それに満足（量とか）できてないかな	
32	「知らないな。見に行くのめんどくさいし」窓の外を見るように話していた 「大丈夫だよ」車椅子で食堂へ向かい、席に着いた。周りの人が嚙下体操をしている中、患者は嚙下体操をしようとしなかった	何でこんなに食事に興味がないんだろうかと疑問に思った。 嚙下体操何でやらないんだろう	
21	「だいいいいの。」と言って、ズボンをまくり、手術痕を見せる。「右は12月に手術をして、左は先月に手術したのよ。だいいきれいにあったの」少し嬉しそうに笑う 「同じね。一度食べてみたいわ」目線を外に向ける	痕が残るのは仕方ないとはいえ、やっぱり嫌だよね。特に女性なんだから。痕が薄くなって良かった。歩けることも嬉しそう 退院したいのかな。そりゃそうだよね。早く良くなって外を歩きたいだろうに	【患者の言動の意味を断定】 6例
6	患者は車椅子に座った状態で体を前後にゆすり、動きたそうにしていた。 静かに車椅子に座っていた	ああ、散歩に行きたいんだな 病室に行きたいってわけじゃなかったんだ・・・。散歩だし、少し長い距離の方がいいよね。	
34	「リハビリさ行けばさっぱりするんだね。ここさ（病室）入れは飽きてしまってさ。外さ出ればさっぱりする」 患者さんも私と一緒に「1・2・3・4・・・」と掛け声を出し、「あんなたいれば頼もしいじゃ」と言った	狭い病室に何時間もいるのは退屈なんだな リハビリは決して楽なものではない。辛いリハビリを応援してくれている人がいれば、励みになるんだなあと感じた	
4	笑いながら「そうなんですよ」と頷き共感した様子で「水分多めにとるように言われているのでトイレが近くて・・・」 「いつも朝の5:30とか6:00とかそのあたりに起きるんです。それから寝たり起きたりしてます。」時計を指示しながら	トイレ多めに行くことは体の老廃物を出すことにもなって体にはとてもよいことだと思ったが、患者さんはトイレに行くことを嫌がり水分を取らなくなることになってはいけないと思い、トイレに行くことは大切で良いことだと言った。 よく眠れないのはトイレに行きたくて原因かと思った	
27	食堂がもう少しなのに、ずっと向こうを見ていた	やっぱりリハビリの部屋に行こうとしているなあ	
31	「んー。」と横になったまま表情を変えずに応えた 「うふふ」と嬉しそうに笑った	もしかしたら鏡見なくなかったかな。でも、いつもこのような返事だからな、どうしよう ③で思った、鏡見たくないわけではなく、いつもの返事だったんだな。	【患者の言動の意味を推察】 4例
25	ベッドに端座位になり、アイスを持ちながら「おはよう」といった。 楽しそうにこちらを見て「今下に行って買ってきたんだよ」と言った	手にアイスを持っている。私が清拭を行っている間に購買に行ったのかな とても楽しそうだな	
7	仰臥位になりながら、左耳にイヤホンをつけながら、顔を少し傾けて、テレビを見ていた。 こちらを向いて「あっおはようございます」と言った	顔が全く見えなかったので、「あれ、寝てるのかな？」 自分が入ってきたのを気づいていないのかな？	
28	「あと、10分くらいしたら動くね。それからトイレに行って・・・ナースステーションにいる？」 車椅子に乗って、ちょうどトイレから出てきて、私を見つめる。「ごめんねー。遅くなっちゃった」	やっぱりまだ痛いかな 外で待ってたから気使わせちゃったかな？	
33	「いや、今日はこれもらった」とトリフローを奥さんにとってもらって、見せてくれながら「手術するからもらった」 トリフローやって見せてくれた。ふー、ふーっと一生懸命していた	今まで、言葉短かったのに、ちょっと長くなった。ということはこっちに触れてほしいのか 意外としっかり玉が浮いている。これを見せたかったのかな。でも、すごい勢いでやって大丈夫かな	
16	体を少し起こして、見やすいように絵を動かして見せてくれた 「うん。今日はさ、ずっと絵っことは書いてたの」と話してくれる。その後すぐに、黙々と色塗りを続ける	もしかして、覗き込んだから、見えづらいと思って、絵を動かして見せてくれたのかな 色塗りに集中しているな。話しかけたら気が散っちゃって、色塗りの邪魔しちゃうな	【患者に与える影響を推察】 1例

## 4) 【患者に与える影響を推察】：1例

患者が絵を描く作業療法中に、学生が見やすいように絵を見せてくれた場面で、「もしかして（自分が）覗き込んだから見えづらいと思って見せてくれたのかな」と感じている記述が、実習2または3日目（実習

初日ではない日）に1例みられた。

## 2. 『自己志向』（表3）（表4）

## 1) 【会話をしなくてはいけない焦り】：5例

学生が「何を聞けばいいかわからなくなり、自



表3 『自己志向』の実習経過日数別例数

自己志向 11例				
実習日数	【会話をしなくては…焦り】	【何をしたいか不安】	【してあげたい願望】	【できる過信】
1日目	4例			
2日目	1例			
2または3日目		2例		
3日目		1例	2例	1例

表4 『自己志向』のサブ・カテゴリー別記述内容

ID	患者が話したこと行ったこと	自分が考えたこと・感じたこと	サブ・カテゴリー
5	「はーい」と元気な声で返事をしてくれた。もう少しでリハビリの時間だったから車椅子に座っていた。	患者さんは車椅子だし、身長も大きめの方だから自分が中腰で話をするのでもいいかな。	【会話をしなくては…焦り】 5例
		会話がなくなってしまったらリハビリの話をしようと思ったりしてたが、初対面で何も知らないのにリハビリのこととか何を聞けばいいのかよくわからなくなってしまった。	
		自分からも話題を振りたいけど何の話をしようかな	
12	話題が終わったのか、沈黙になる	患者の言葉が聞き取れた。口の動きをみれば何を話しているのか分かるかも	
	洗濯物をネットにしまい終わり、「テレビ見るが」と言って、洗濯物の話題を終了する	話し終わっちゃった。こっちからも何か話さないとか	
22	テレビを見ながら、CM中は会話をする。洗濯物の話題から完全に離れる	何か患者にアドバイスを言えなかった。やっぱり学生だから頼りなかったかな	
		もう少し何か洗濯物について話せばよかった。でも、もうテレビ見てるし、また話題を戻すのも気まずいので、このまま違う話をしよう	
26	「量が少ないからお腹すいてくるから、本当はだめだけど、下にある売店からチョコレートとか買ってきてそこの引き出しの中に隠したりしてる人もいるんだ」と言って、笑いながら床頭台の引き出しを指した	何か話さなきゃと思って、とりあえずお昼ご飯を食べていたのを知っていたからそのことについて話そうと思った	【何をしたいか不安】 3例
		大事なこと聞いた気がするけど、どうすればさらに広げられるのか、返し方がわからなかった。	
29	「わっきゃ農家だや」とベッドの上で仰臥位になって話す	あ、自分の家でも農業やっているから少し話ができそうだな。	
	私の目を見て興味深そうに「んだのがー。わの家でもリングと田んぼやってらんだー」	共通点見つけられたから、ここから話を広げられそうだな	
	「んだな。あの頃だば、ずんぶ忙しいな」と述べた後、少し沈黙。額に手を乗せてはーっと天井を見ている	あれ、思った以上に話せないな。多分30分くらい話して疲れたんだな。そろそろ話所に戻ろう	
11	嚥下体操をする時間になっても看護師はこなかったで、「時間なのに看護師こないなあ・・・」	昨日はこの時間に来ていたのに、今日は忙しいのかな。看護師いないけど勝手に体操していいのだろうか	
	「そうだね。待ってるか」と言って、時計を気にする	看護師来ないけど始めようかな。でも一人だと不安だし・・・	
35	「3人・・・長男は早くに亡くなってしまったの」少し間をおいてから、長男がなくなっていることを話した	長男が亡くなっているということに動揺してしまった。聞いてはいけないことを聞いてしまったと思った。このことを聞いた時、もともと4人子供がいて、長男は幼い頃に亡くなってしまったという間違った解釈をしてしまった	【何かしてあげたい願望】 2例
	「いや、子供は元々3人いて、長男は第2子。生物の教師をしてただけだね・・・」	もっと幼いころに亡くなっていると思ったため、驚いた。なぜなくなってしまったのかを聞くのは気が引けるし、何を話していいのかわからなかった	
14	「んだが。」と笑顔で言った。	医師の話の内容が患者さんにとって辛いことだったとしたら、その思いを共感することが私にできたのだろうか。詳しく聞きたかったけれど、時間だし、挨拶に話を切り替えないといけないよね	
9	「うんうん。この病院（の看護師）〇〇よりも忙しいから・・・」と少し残念そう	やっぱり一日中寝ているのは苦痛なんだなあ。車椅子に座らせてあげたいなあ。	【自分はできる過信】 1例
		看護師さんに相談してみよう。午前中入浴したから疲れていないか心配だな。	
19	「んだ、やりてえな」	やっぱり、前にやってたことやりたいよね	
	「でももう、リングの枝切ののだのできないべ。このでまいはんで（麻痺側の手をさする）」	私がちょっとでもリハビリの意欲が出るようにしてあげたいなあ・・・	
17	「冷たいな」と手を見ながら言う	あまり冷たいと感じなかったけれど、冷たいと言っていたから・・・	
		さっきも言っていて患者さんの妹がタオルを巻いていたからタオルを巻いてみよう	
	「いいよいいよ」動く私をじっと見ながら	開けたら新しいタオルがあったけれど、勝手にタオルを巻いていいんだろうか・・・	

分からも話題を振りたいけど何の話をしようか」と感じたり、沈黙になると「こっちからも何か話さない」と感じたり、「何か話さなきゃ」と思ったり、「思った以上に話せないな」と感じている記述が5例みられた。

再構成記録が記述された実習日は、5例中4例が実習1日目に、1例が実習2日目にみられた。

2) 【何をしたいか不安】：3例

嚥下体操の時刻になっても指導看護師がいない場面

で、「勝手に体操していいのだろうか」と不安を感じたり、患者から長男が亡くなっている話を聞かされ、「動揺してしまった。聞いてはいけないことを聞いた。(その後)何を話していいかわからなかった」や、「患者が医師から辛い話をされたとしたら共感することができただろうか」と不安に思う記述が3例みられた。再構成記録が記述された実習日は、実習初日にはなく、実習2または3日目(実習初日ではない日)に2例、実習3日目に1例であった。

### 3) 【何かしてあげたい願望】: 2例

患者から「ここの病院の看護師は忙しいから」と訴えられ、「1日中寝ているのは苦痛なんだなあ、車椅子に座らせてあげたいなあ」と考えたり、片麻痺のある患者から「(受傷)前のように、(仕事を)やりたい」と訴えられ、「少しでもリハビリの意欲が出るようにしてあげたい」と思う記述が2例みられた。再構成記録が記述された実習日は、いずれも実習3日目であった。

### 4) 【自分ではできる過信】: 1例

患者から「手が冷たい」と訴えられ、以前に家族がやっていたのを見ていてその方法で「やってみよう」と思ったという記述が、実習3日目に1例あった。

## 3. 『関係志向』(表5)(表6)

### 1) 【拒絶される恐怖心】: 4例

患者との会話がなくなったことに「あわてて」「沈黙を避けなければ」と思い質問をするが、「患者がちゃんと返してくれなくて、まずい話をしてしまったと思う」という記述や、「注意をすることで機嫌を悪くしたらいやだな」と思い、患者の微笑みをみて「怒ってなくてよかった。でもいやそうに感じる」という記述など4例みられた。再構成記録が記述された実習日は、実習1日目に1例、実習2または3日目(実習初日ではない日)に3例であった。

### 2) 【受け入れてもらった安心感】: 4例

患者から話をしていただき、「私のことを気にかけていてくださる。いたわろうとする気持ちと親近感を抱くようになった」という記述や、患者が悩みを相談してくれたり、「看護師に秘密にしていたことをしゃべってくれた」という記述など4例みられた。再構成記録が記述された実習日は、実習1日目に1例、実習2または3日目(実習初日ではない日)に1例、実習3日目に2例であった。

## 考 察

### 1. 『患者志向』の特徴

#### 1) 実習経過日数との関連

病院実習3日間の実習経過日数別にみると、実習初日には、【患者の訴えの原因を推測】しようとするが、これまでの知識や体験をもとに【患者の言動の意味を断定】する傾向にある。実習の経過とともに、【患者の言動の意味を推察】したり、自分の言動が【患者に与える影響を推察】できる傾向に変化していくことが示唆された。

#### 2) 学生の心理的特徴

『患者志向』のサブ・カテゴリーとして抽出された【患者の訴えの原因を推測】【患者の言動の意味を推察】【患者に与える影響を推察】に、「…かな」という表現が特徴的にみられた。日本語学者の森田(2013)は、「かもしれない」は、事実がどうであるか不明・未知の話し手が、自分なりの過程的事実を示すことばであり、自分の勝手な解答であるから、当たる確率は低いと見ていい。同様に、「……だから、あるいは……／……だから、もしかしたら……」のような理屈で推していく知的な判断は「かもしれない」の特徴である。話の場に何一つ手掛かりはなくとも、頭で考えて、自由な想像をめぐらすこともできる、と述べている。

看護学部1年次生は看護学に関する学びが深いとは言えないものの、既習の知識や体験をもとに、「患者は……かもしれない」と、学生は患者に関心を向けて、【患者の訴えの原因を推測】したり、【患者の言動の意味を推察】した結果、「……でないかもしれない」という可能性も引き受け、揺らぎながら、その心情に耐え切れずに【患者の言動の意味を断定】してしまいたい葛藤状態にあると考える。さらに、森田(2013)は、助動詞「～だ」は、名詞および名詞的な単位に付いて、その取り上げた事柄や述べている内容に対する話し手の肯定的な認定判断として断定することばであると述べている。「だ」の用法として、(1)名詞に付いてその事柄がまちがいがなく現実のこととして生じているとの判断を表す、(2)主語・述語関係の認定判断として用いる、主述関係を意味的に妥当なものとして確定する話し手の立場を表すと言ってもいい、(3)ある状況を設定して、それを確かなことと認定する気持ちを表す、(3)準体助詞「の」の後に付けて、それが

表5 『関係志向』の実習経過日数別例数

関係志向 8例		
実習日数	【拒絶される恐怖心】	【受け入れてもらった安心感】
1日目	1例	1例
2日目		1例
2または3日目	3例	
3日目		2例

表6 『関係志向』のサブ・カテゴリー別記述内容

ID	患者が話したこと・行ったこと	自分が考えたこと・感じたこと	サブ・カテゴリー
20	目を合わせて「ああ・・・おいしいよ」	すぐに会話がなくなってしまう、あわてて次の質問を考えた	【拒絶される恐怖心】 4例
	「とりあえず眠れますよ」目を合わせ	会話が終わり、沈黙をさげなければと思い、次の質問を考えた	
	少しキョロキョロしたり、そわそわした感じで「リハビリのここに行ってきた。そっちの方が勉強になるよ」と同じような内容を2回言った	質問にちゃんと返してくれなくて、まずい話をしてしまったかなと思う。もう少し話をしたいと思った。	
13	しばらくすると、スプーンに盛る量も多くなり、食べるペースも嚥下が完全にできていない状態のままスプーンを口に運んでいた。	あっ、スプーンに盛る量も食べるペースも変わってきてる。どうしよう。看護師にも言われているし注意した方がいいよ。でも、機嫌悪くしたらいやだな	
	気づいたのか、微笑みながら「うん」と、私の様子を伺いながら頷いた	よかったあ。怒ってなくて。でも、嫌そうな様子に感じるなあ。	
18	「んだねー、楽しみだね」	退院のことについて、話を切り出したのはいいけど、どこまでなら聞いてもいいんだろう。家族のことについては大丈夫かな	
	「そう。娘は自分の家を行ったり来たりしてくれると思うけど・・・」少し視線が下になってくる	あまり笑顔で話してくれないな。やっぱり聞かない方が良かったかな。普段は施設の方で過ごすみたいだし、家族とあまり一緒にいないし、本当は寂しいのでは・・・。気になるけど何て声をかけたらいいのだろう。	【受け入れてもらった安心感】 4例
30	「看護師さんにいつも俺、いじめられるんだよね。本当に」と嘆いていた。	いやー、いじめているわけではないと思うんだけどなー。でも、否定したら患者さん、どんどんテンション下がって行くんだろうな。とりあえず、テンション下がらないようにしよう	
1	笑顔で「お昼食べてきたの？」	私のことを気にかけてくださる。患者さんをいたわろうとする気持ちと、患者さんが私を気にかけてくださる心配りが場の雰囲気から感じられ、午前中よりもより親近感を抱くようになった。	
	「私は魚の方が好きだからね・・・でも嫌いなものをどうやっておいしく食べるか考えるのが好きなのよ。」	拒絶ではなく、自分自身に合った食べ方を実践していることを教えてくださった。健康のことにとても興味を持ち、維持していこうとする前向きな気持ちが伝わり、この方のADLを向上するような手助けがしたいと心から思った。	
15	「ここさ座るが？」と言い、ベッドを指す。「ここさ座れば怒られるんだが？」	患者に少し気を遣わせてしまったな	
	急に小さな声になって、「・・・やっぱり、人いるからね。気になるけれど、皆我慢していることだからね」	自分はすっかり「良く眠れたよ」と患者が言うものと思っていたので、少し驚く。しかし、患者が不便に思っていることを会話の中から聞き出せたことに少し満足	
8	「でも、昨日から一人で歩いてただけど、先生がそばにいないとすぐ看護師さんが心配して来るんだよね。」	悩みを初めて相談してくれた！昨日から自室内自立してるって申し送りでしゃべっていたな。でも先生って誰のことだろう。	4例
	「うーん、やっぱりそうだね。実は内緒でトイレまでは自分で立って歩いてたし」	看護師さんに秘密にしてリハビリしてたんだ。でも、今日から自室内自立になったから、秘密をしゃべってくれたんだろうな。	
36	「うん」「うん」と言いながら、頷いてくれた。「頑張ってるね」	自分が「頑張ってるね」って言われちゃった。でもうれしいな。最初に挨拶に言った時も、患者さんの一言は「頑張ってるね」だったな	

間違いないことと強調する気持ちを表す、と言われており、「・・・かもしれない」と患者に関心を向けずはみたものの、専門的な知識を根拠とした結論を導くには限界を感じ、【患者の言動の意味を断定】してしまっている結果であると考え。さらに、看護学の既習の知識やこれまでの体験では、結論を導き出すことが困難なメッセージに対して、反応できないでいる焦りや自信がないという不安定な心境に耐えかねて、考え得る範囲で結論を確定して、自己の心境を落ち着かせたいという気持ちの表れでもあると考える。

また、サブ・カテゴリー【患者の言動の意味を断定】に分類された表現として、「とりあえず」という副詞がみられた。森田(2013)は、<sup>6</sup>取るべき物も取らずに、という基本義から、あれこれ是非を詮索する時間的いとまがないので、不十分な状態ではあるが、完全な状態になるまで待たずに事を行うという意味に用いられる。<sup>7</sup>急いでいる、間に合わない、という状況下でやむを得ない行為に用いる、と述べている。1年次生なりに、コミュニケーションにおいて、患者に関心を向けた結果、自分が何かをしなくてはいけないという、



焦りの気持ちの表れであると考える。

看護者を主体に、患者を客体とし、患者-看護者関係の成立を基盤に看護が展開されることを学習する1年次生の臨地実習において、学生が考えたことや感じたことが患者の感情や思考に向いている「患者志向」は、看護を展開するための基盤を有していると言える。実習指導教員は、学生がその志向を有していることを言語化し学生に伝えた上で、患者が訴えたり、言動として表現したことの1つ1つの意味を、「(患者は) どうしてそのように言ったのだろうか」や「どんな時に人間はそうするのだろうか」など、既習の知識を想起させながら思考させていく丁寧な指導が重要であると考ええる。

## 2. 『自己志向』の特徴

### 1) 実習経過日数との関連

学生が考えたことや感じたことが、学生自らの感情や思考に関心が向いている『自己志向』で抽出された4つのサブ・カテゴリーを病院実習3日間の実習経過日数別にみると、実習初日に自分から【会話をしなくてはいけない焦り】がみられ、2日目以降自分が【何をしたいか不安】になり、3日目に自分が【何かしてあげたい願望】と【自分はできる過信】を有する傾向が明らかになった。病院実習初日のコミュニケーションにおいて1年次生は、それまでの人間関係の範囲内で「おしゃべりができる」や「場を盛り上げることができる」自信を持ち実習を開始するが、受持ち患者とのコミュニケーションを実践してみて自分の未熟さを実感し、できないことに耐えられなく、つまり沈黙に意味を見いだせずその時間に耐えられないことや、思っていたほど会話が続かないことに対して、焦りを感じる傾向が強いと考える。

### 2) 学生の心理的特徴

「基礎看護学実習Ⅰ」の目標に到達度として明記されていないが、初めて看護学臨地実習に臨む学生は、初回であるとは言え、「私が」患者に「何かをしてあげたい」という願望を持っていると言える。その思いがあるがゆえに、【何をしたいか不安】になったり、【自分はできる過信】をする。学生である「私が」患者に「何かをしてあげたい」という、患者のために何か役に立つ存在でありたい思いを表していると考ええる。

病院実習2日以降の再構成記録における特徴的な記

述語として、「よかった」という表現がある。この語は、好感を覚え満足を得るような望ましい状態を意味し、ある行為や状態がこちらの望む状態に適合してくることを意味することばである。さらに、記述語として「うれしい」という表現がみられたが、この語は森田(2013)がいう、自己にとって望ましく都合のいい状況、期待通りの状態に接し、また、そうなったことを知って喜ばしく感じる気持ちを意味することからも、学生が望んだ状態になった結果を学生が満足している心情を表していると考ええる。

また、「驚いた」という表現があったが、森田(2013)は、話し手当人の常識や生活環境、生活習慣と極端に変わった場面に接して、心に異様な刺激を受ける場合や、予想していなかった事柄が展開して、おや? と思ったり、はっとしたりする場合に用いると述べている。その状況は、マイナス評価の状態(好ましくない状態)とは限らない。プラス評価の状態もあれば、特に良くも悪くもない状態もある。いずれにしても、話し手である患者と聞き手である学生「私」との間の状況に、落差を感じた結果起こった精神作用を表現している語であると考ええる。

「自己志向」傾向にある1年次生には、患者との関係が成立し、看護が展開される前提である「患者は」や「患者にとって」という風に、患者を客体として感じたり考えることができるように教育していくことが必須である。ハウエルと久米のベンチャー理論(1997)によると、コミュニケーションが協力活動(ジョイントベンチャー)として成功するか否かは、5つの能力レベルによると指摘している(立川 1993)。そのうち、レベル1は「無意識的無能力」と言われ、このレベルでは、人は何をしたいかがわからず、あるいはわかっていてもそれを満足に遂行できず、自分の発するメッセージが相手にどのように受け取られるかを察知できない状態である。レベル2は「意識的低能力」と言われ、あるやり方を試みるが、うまくいかないと止めてしまったり、ふと思いついた新しいやり方を試みながら、試行錯誤を重ねる状態である。看護学部1年次生の「自分が」焦りを感じ、【何をしたいか不安】になり、【何かしてあげたい願望】を持ち、【自分はできる過信】を有しており、相手、つまり「患者が」あるいは「患者にとって」という患者の立場で感じたり考えることができていないコミュニケーションは、ハウエルと久米によるレベル1・2であると考ええる。レ



ベル3では、自分の行動がどの程度であるかを理解し、なぜうまくいっているのか、あるいはそうでないのかを論理的に分析できる。さらに、自分の能力をわきまえ、相手の反応に合わせて自分の言動をコントロールでき、経験を積み重ねるにつれてより適切で効果的な最善策を探る。自分のことを話すよりも、相手の話をよく聞き、コミュニケーションしている相手の意図を意識するようになる。看護学部1年次生が、看護に求められるコミュニケーション能力を習得するためには、コミュニケーションにおけるレベル3の「意識的高能力」の基盤となる、患者の立場で感じたり考える能力を身につけることが必須であると考え。そのために実習指導教員は、「どうして患者はそのような言動をしたのだろう」とか、「患者はどのような思いでいるのだろうか」と、学生の「自己中心性」を患者に向けさせたり、援助関係における患者と看護者の関係を考えさせるなど、感じたり考える主体を患者に変換していく「視点取得」へ向けるメタ認知（三宮 2014）を活用した教育が有効であると考え。

### 3. 『関係志向』の特徴

#### 1) 実習経過日数との関連

患者と学生である自分との関係に関心が向いている『関係志向』では、患者に【拒絶される恐怖心】と【受け入れてもらった安心感】の2つのサブ・カテゴリーが抽出された。

病院実習3日間の実習経過日数別にみると、患者に【拒絶される恐怖心】【受け入れてもらった安心感】は、病院実習の経過日数にかかわらず、その時々でのコミュニケーションの場面において、常に学生が持つ表裏一体の心情であると考え。

#### 2) 学生の心理的特徴

自分が患者から【拒絶される恐怖心】と、患者に自分を【受け入れてもらった安心感】という表裏の心情がみられた。この背景には、大学生の傾向として指摘されている（三宮 2004）、限られた集団の中でのみコミュニケーションをとる傾向が強まっていることや、対面でのコミュニケーションの機会が減少していることなどが影響していると考え。さらに、大学生の問題意識として、「意見の相違や衝突が起こったとき、どう解決すればよいのかかわからない」「人が何を考えているか気になる」「人間関係に気を遣いすぎる」「自分の考えを否定されるのが怖い」（三宮 2011）な

どが挙げられている。『関係志向』に分類された再構成記録における記述語として、「怒ってなくてよかった」がみられた。自動詞である「怒る」は、他者の行為や態度・仕打ち、まれに自身に原因する事柄が意に添わない、許せない、不当である、しゃくにさわる、悔しい、ばかにしているなどの理由で感情がいらい立ち、我慢できなくて一時に外に表す（森田 2013）という意味である。ある原因によって誘発される感情現象であるため、気を遣いながら表現した学生自身の言動が、患者の意識の中にある基準に照らして外れていなくて、患者に拒否されなくて安心した心情を表していると考え。

また、再構成記録における特徴的な記述語として、「やっぱり」という表現がみられた。副詞である「やはり」は、現実の状況が、話し手の観念内にある基準と差がない場合に用いる（森田 2013）。その基準のうち、記述した1年次生の心理状況として、話し手が心に描いた状態を基準にすえた「やはり」であり、その事柄・事態が、話し手の期待や予想、常識的判断、思考的判断などと比べて差がない場合に用いられ、学生自身の過去の経験を基準に判断し、その範囲内であることに安心している心情を表している語であると考え。

臨地実習で患者を受け持つことに関して、臨地実習における状態不安と実習ストレスの関連の研究で、3年次生の実習前に「患者から拒否された」項目において強い正の相関を認めている（近村他 2007）と報告されている。このことは、3年次生においてなお、実習前に受持ち患者に拒否されず、患者との関係が成立することに関心を向けている結果であると言える。初回臨地実習で、見ず知らずの他者と関係を作ることに対して、1年次生の不安が大きいことは容易に予測がつく。しかし、軽度の不安は、注意力を高め、学習や変化への刺激となり成長をもたらす。自分が「できるだろうか」という不安は、「やりたい」という気持ちの表れでもとも言われている（藤田 1996）。実習指導教員は実習前のオリエンテーションにおいて、学生が当該実習の概要を具体的に知り、学習途上にある看護学生として真摯に学ぶ心構えを持つことができるように、学生個々の反応を的確に捉え過度の不安を持たないよう個別に対応していくことが必要であると考え。

## ま と め

看護学部1年次生の初回臨地実習における受持ち患者とのコミュニケーションの特徴として、以下のことが明らかとなった。

1. 35例中、学生が考えたことや感じたことが患者の感情や思考に向いている『患者志向』が16例(45.7%)、学生自らの感情や思考に関心が向いている『自己志向』が11例(31.4%)、患者と学生の関係に関心が向いている『関係志向』が8例(22.9%)であった。
2. 『患者志向』では、実習初日に【患者の訴えの原因を推測】しようとするが、これまでの知識や体験をもとに【患者の言動の意味を断定】する傾向にある。実習の経過とともに、【患者の言動の意味を推察】したり、【患者に与える影響を推察】できる傾向に変化していくことが示唆された。
3. 『自己志向』では、実習初日に自分から【会話をしなくてはいけない焦り】がみられ、2日目以降自分が【何をしていいか不安】になり、3日目に自分が【何かしてあげたい願望】と【自分ではできる過信】を有する傾向が明らかになった。
4. 『関係志向』では、患者に【拒絶される恐怖心】【受け入れてもらった安心感】は、病院実習の経過日数にかかわらず、その時々のコミュニケーションの場面において、常に学生が持っている思いであることが示唆された。

## 文 献

- 1) 大坊郁夫, 磯友輝子 (2009), 対人コミュニケーション研究への科学的アプローチ, 大坊郁夫, 永瀬治郎編, 関係とコミュニケーション, 2-3, ひつじ書房
- 2) E.ウィーデンバック, 都留伸子ほか訳 (1981), 臨床実習指導の本質 看護学生援助の技術, 157-170, 現代社
- 3) 藤田美津子 (1996), 看護教育レポート 初めての臨床実習を前にした看護学生の不安-学習への動機付けとして-, 看護展望, 21 (3), 386
- 4) 林 進 (2004), コミュニケーションと人間社会, 林進編, コミュニケーション論, 1-7, 有斐閣
- 5) 林 智子, 井村香積 (2012), 看護初学者のプロセスレコードからみるコミュニケーションの特徴, 三重看護学誌, 14 (1), 141-148
- 6) 石井 敏 (1996), コミュニケーション研究の意義と理論背景, 日本コミュニケーション学会 橋本満弘, 石井 敏編, コミュニケーション論入門, 3-10, 桐原書店
- 7) 川田智美, 木村由美子他 (2005), 看護教員が生活体験の乏しさを感じた実習場面, 群馬保健学紀要, 26, 133-140
- 8) 亀田和恵 (1998), 基礎看護学実習における看護学生の意識-パーソナル・コミュニケーションを中心に-, 日本看護研究学会雑誌, 21 (3), 371
- 9) 工藤千賀子, 原田真里子他 (2007), G大学看護学部における社会的スキルの実態, 北日本看護学会誌, 10 (1), 45-51
- 10) 森田良行 (2013), 基礎日本語辞典, 204-206, 254-256, 242-244, 595-596, 620-623, 819-820, 1154-1156, 角川学芸出版
- 11) 村上ヒトミ (2000), 看護学生がとらえる思いやりの概念と思いやり行動に影響する要因, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 25, 68-75
- 12) 野崎智恵子, 千田陸美他 (1999), 看護大学生の社会的スキル, 日本看護学会論文集, 看護教育, 30, 74-76
- 13) 三宮真智子 (2014), 対人コミュニケーションに活かすメタ認知, 日本看護学教育学会誌, 24 (2), 79-87
- 14) 三宮真智子 (2004), コプレゼンス状況における発想支援方略としてのあいづちの効果 思考課題との関連性, 人間環境学研究, 2 (1), 23-30
- 15) 三宮真智子 (2011), 「自分の考えをもつ」ということはどういうことか, 児童心理, 65 (5), 1-9
- 16) 立川敬二 (1993), コミュニケーションの構造, 58-59, NNT出版
- 17) 千葉京子 (2002), 看護学基礎教育における社会的スキル訓練, ヘルスカウンセリング, 4 (6), 26-31
- 18) 近村千穂, 石崎文子他 (2007), 看護臨床実習におけるストレス状況と性格の関連, 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌 7 (1), 187-196
- 19) 淘江七海子, 堀美紀子他 (2004), 看護学生のコミュニケーション能力育成に関する研究-CAI教材「言語的応答訓練」による学習効果-, 日本看護学教育学会誌, 14 (1), 13-24
- 20) ウィリアム・S・ハウエル, 久米昭元 (1997), 感性のコミュニケーション-対人融和のダイナミズムを探る-, 3-20, 大修館書店

## COMMUNICATION-RELATED CONCERNS OF FIRST-YEAR NURSING STUDENTS DURING THEIR INITIAL FIELD PRACTICUM - ANALYSIS USING RECONSTRUCTED RECORDS OF PRACTICUM SCENARIOS -

Chikako KUDO<sup>1)</sup>, Naoko WATABE<sup>1)</sup>, Teruko ABE<sup>1)</sup>

**Abstract:** The objective of this study was to elucidate the characteristics of communication during the initial field practicum of first-year nursing students, particularly the students' areas of concern. Descriptions provided in the reconstructed records of communication scenarios involving 35 students and the patients under their care were categorized based on the classification scheme of Hayashi et al. as "patient-oriented," "self-oriented," or "relationship-oriented," and the characteristics of each category were analyzed. The most common category, applied to 16 students, was "patient-oriented," which showed concern mainly for the patient's emotions and thoughts. This indicated that although the students had little nursing knowledge, they were concerned about the words and actions of the patient who was the object of the nursing. The category for 11 students was "self-oriented," indicating concern mainly for the student's own emotions and thoughts. These students tended to feel pressed to converse with the patients, particularly on the first day of the practicum, to feel anxious about not knowing what to do, and to have a desire to do something as the practicum progressed. Eight students were categorized as "relationship-oriented," indicating concern mainly for their relationship with the patient. In these cases, each time the students had contact with patients throughout the practicum, they experienced converse feelings of fear of rejection and relief at having been accepted.

**Key words :** initial field practicum, communication scenarios, concerns, reconstructed-records

---

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University

TEL : 0172-31-7100, FAX : 0172-31-7101, E-mail : kudou-chi@hirogaku-u.ac.jp